

商品と日常生活文化の受容と流入への警戒：  
18世紀の茶

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 実佳 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00006693">https://doi.org/10.14945/00006693</a>

# 商品と日常生活文化の受容と流入への警戒： 18世紀の茶

鈴木実佳

インド産の綿織物（calico, キャラコ）は、東インド会社がインドから仕入れ、1670年代、1680年代に家具用及び服地として、チンツ（chintz, 更紗）と共に大ブームとなった。17世紀後半には東インド会社の輸入品の3分の2程度を絹や木綿が占めていた。この優れて美しい商品の流入にたいしては、国内の毛織物業者から批判の声があがり、否決されはしたものの1698年にはインド織物着用禁止を求める法案が提出され、1700年にはいわゆるキャラコ禁止法、1720年にはキャラコ使用禁止法が議会を通り、これらの法律により、白地は対象外であるとか、除外品が設けられるとか、抜け道が用意されてはいたものの、外国産品にたいして禁止法で応じるという方策がとられたことになる。禁止とは言っても、恵まれた立場にいる人々にとって、最先端の異国趣味をとりいれながら自らの繁栄を示すのは難しいことではなかった。新旧東インド会社が並立した際の調停役を果たし、東インド会社の役員も務めたクラッグス（James Craggs, the Elder, 1657-1721）は、1710年ころの肖像画で、インド産のチンツの柄入りに影響されたことを感じさせる珍しい模様入りの絹地を使った胴着を着用して成功者らしいポーズをとっている<sup>1</sup>。彼はかねてよりモールバラ公爵の庇護を受け、この肖像が描かれたころは、要人たちの間の交渉仲介者として重宝され、こののち1713年には逓信大臣となり、キャリアの頂点に達しようというところだった。南海会社の立役者として泡沫事件の1720年を迎え、苦境に陥るのは、まだ少し先の話である。

17世紀末には、東インド会社の輸入額の1%に過ぎなかった茶は、18世紀の折り返し前には20%を超え、1760年頃には40%以上を占めるようになっていた<sup>2</sup>。

---

<sup>1</sup> Aileen Ribeiro, *The Gallery of Fashion* (London: National Portrait Gallery, 2000), p. 98.

<sup>2</sup> John Keay, *The Honourable Company: A History of the English East India Company* (London: HarperCollins, 1991), pp. 348-50; William H. Ukers, *All About Tea* (New York: The Tea and Coffee Trade Journal Company, 1935), I, pp. 43-48.

茶は、1773年のアメリカから見たら「暴虐と略奪と圧政と流血に精通した」「全世界で最も強力な貿易会社」の重要商品になっていたわけである<sup>3</sup>。独占企業の振る舞いにたいする人々の反応を別にしても、商品の潤沢な流通には国の繁栄をめぐる誇りと外国産品に頼ることへの漠然とした不安感が伴った<sup>4</sup>。そのような急成長を遂げているこの商品については繊維製品のときの禁止法による抑制とは違った反応がみられた。1664年にオランダ東インド会社から2ポンド2オンス（約962g）が輸入されたのを皮切りに、1669年にはイギリス東インド会社による222ポンドの輸入、1701年には10万ポンド以上、1740年代には年平均200万ポンドの輸入が記録されるという爆発的な伸長をみせた商品の人々がどう受容しようとしたのか、あるいはどんな警戒心をみせたのか、または拒絶しようとしたのかについて、本稿では出版された書物と絵画を参考にして追っていく。

## 1. 18世紀の‘Green tea’

1730年と1750年に茶にかんする書物を出版している内科医トマス・ショート（c.1690–1772）は、日本の「緑茶」を絶賛している。彼によると、「茶を我々にもたらすことができるのは、日本、中国、シャムのみであり、日本産は通常他より澄んだ緑色で、葉は小さく、香りも味も良いので、非常に珍重されている<sup>5</sup>。」ヨーロッパ人たちが最初に知ったのは緑茶であったが、身体の弱い中国人が武夷茶を飲んでいるという認識から、薬効があるのは武夷茶であると考えられて、流行がすでに武夷茶に移ったとショートは述べているが、実は身体に良いのは緑茶であると思っている。「私たちにわかっているのは、概して緑茶の方が私たちの目的にかなっており、それで身分の高い人は緑茶を用い、武夷茶の価格は下がり、緑茶の価格は上がったということだ<sup>6</sup>。」

彼は、自分で行った実験の結果と、数十年間の世間一般の傾向と思われるこ

---

<sup>3</sup> ‘To the Tradesmen and Mechanics of Pennsylvania’, 4 Dec 1773, quoted in Nick Robins, *The Corporation That Changed the World : How the East India Company Shaped the Modern Multinational* (London: Pluto Press, 2006), p. 5.

<sup>4</sup> Philip Lawson, *The East India Company : A History* (London: Longman, 1993), pp. 96–7.

<sup>5</sup> Thomas Short, *A Dissertation Upon Tea, Explaining the Nature and Properties by Many New Experiments; and Demonstrating from Philosophical Principles, the Various Effects It Has on Different Constitutions....* (London: Fletcher Gyles, 1730), pp. 12–3.

<sup>6</sup> *Ibid.*, p. 13.

と、そして書物から仕入れた知識を組み合わせ、茶にかんする知識を伝えようとしている。書物で学んだ歴史・文化的背景に加えて、社会・経済情勢を含めた現実の状況判断を下す立場をとり、それが自らの感覚的経験と科学的実験を支えている。彼の日本に関する知識は、多くの西洋人にとって情報源になっていたケンペルの『日本誌』(Engelbert Kaempfer, 1651–1716)による<sup>7</sup>。茶を武夷茶(3種)と緑茶(6種)に分け、そのうち緑茶に分類される一種(Dutch Bloom)については非常に良質であって、日本の茶らしいが、これは自分で見たことがないので描写を控えると断り書きをいれている<sup>8</sup>。その他については、実験を行ってもおり、実際に手にとり、味を確かめて書いているらしい。

ショートは、シェフィールドに内科医としての基盤をもち、鉱泉水を長年にわたって研究していた。18世紀の湯治娯楽リゾート興隆には、内科医など専門家による知見の仲介が重要な役割を果たしていた<sup>9</sup>。17世紀から18世紀に、水の化学的成分分析が試みられ、数字をもってある鉱泉の効能を実証すること、あるいは他の鉱泉、つまり競争相手となるような地域の鉱泉について効能が期待できないことを実証することに多大な努力が払われ、宣伝・論争パンフレットが盛んに出版された<sup>10</sup>。ショートの鉱泉水研究書もその一環である<sup>11</sup>。それと同様の実験を基盤にする手法で、茶に臨んだのが1730年の書物である。彼が関心をもって研究した水と茶は、ともに18世紀のイギリスの人々の健康保持熱とそれをめぐる文化的・社会的・経済的変化のなかでも大きな位置を占め、彼の時流をみる眼はかなり冴えていた。

1730年出版の書物は、モルトン卿(the Right Honourable Thomas Lord Malton, Knight of the Bath)への献辞で始まっている。このパトロンは、Thomas Watson-

---

<sup>7</sup> ケンペルの手稿の多くは、サー・ハンス・スローンの手にわたり、『日本誌』はドイツ語から英訳の上1727年に出版された。オリジナルは現在大英図書館蔵。ショートの本では注でKempserと綴られている。

<sup>8</sup> Short, p. 14.

<sup>9</sup> Norman Moore, 'Short, Thomas (c.1690–1772)', rev. Patrick Wallis, *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press, 2004[<http://www.oxforddnb.com/view/article/25461>, accessed 19 Oct 2011]

<sup>10</sup> Noel G. Coley, "Physicians, Chemists and the Alalysis of Mineral Waters; "The Most Difficult Part of Chemistry"" in *The Medical History of Waters and Spas*, ed. Roy Porter, *Medical History, Supplement* (London: Wellcome Institute for the History of Medicine, 1990), 56–66 ; Christopher Hamlin, "Chemistry, Medicine, and the Legitimization of English Spas, 1740–1840," in *The Medical History of Waters and Spas*, 67–81.

<sup>11</sup> *A Rational Discourse on the Inward Use of Waters* (1725); *Institutes, or, An Introduction to the Examination of Mineral Waters* (1766).

Wentworth, 1st Marquess of Rockingham (1693–1750) で、ショートは彼の内科医を務めた。なお、モルトン卿の息子 (Charles Watson-Wentworth, 2nd Marquess of Rockingham, 1730–82) は、1765–66と1782年に首相を務め、印紙条例廃止は彼のもとで行われた。彼はボストン茶会事件及びアメリカ独立戦争の大部分を野党勢力として、イギリス議会の優越を唱えながら、茶税廃止を主張し、事態の収束を図ろうとしていた。

## 2. 個人的嗜好・公に意見を述べる著者の立場・爆発的流行の脅威

ショートは、茶について個人的には好意的であると思える。書物の中身では、賛否両論を伝え、特に、体質などにより異なった効果を生むことや、必ずしも良質のものをイギリス人が手にしているわけではないことから、警戒が必要であることも伝えている。しかし、表紙には、エドモンド・ウォラー (1606–87) の詩から「ヴィーナスには銀梅花、ポイボスには月桂樹／茶はそのどちらにも勝り、われらはそれを称える」を掲げ、立場を明らかにしているようなものだ。

彼は、この書物を出版する理由を「さまざまな苦痛や病を予防し、緩和する試み」であり、「公益」に向けられたものであるので、パトロンの庇護を受けるに値すると始めて、「最近4–50年の間に不思議なことにあらゆる人々（最下層を除いて）の間に広まっているというのに、研究と理解がそれに見合ったものになっていない」と述べる<sup>12</sup>。茶の普及という事態は「不思議なことに」進行している。その進行に、正確な知識と知識の普及が追い付いていないことを憂えて、ギャップを埋めることが専門家の務めと自認している。彼のみたところ、商品自体は既に多くの人に浸透しているのであるから、知識も普及すべきと考えている。そして、その知識を賛否両論どちらの立場もなるべく公平に伝えようと試みている。反対論について紹介するときには、「緩効性で効力をもつ毒」であり、痛風、関節炎、リュウマチなどに効果があるのは確かであるが、それは茶によるのではなくて湯を沸かすことの恩恵であると述べている。



<sup>12</sup> Short, p. 3.

また、病気を治すような印象を与えながら、実は、より深刻で悪性の病気が茶葉に潜んでいて、それがまき散らされる恐れがあるという、密かに毒をまわす見えない敵をも想定しようと陰謀説めいた説があることを指摘する<sup>13</sup>。

それというのも、医者として茶の可能性を十分に認識しながら、警戒心を誘わずにはいられないほどの流行を茶がみせていたからである。もともと茶はその薬効が宣伝されて、貴重な薬として導入されたことは、1660年代のコーヒーハウスのチラシでもよく知られている<sup>14</sup>。内科医としては、絶賛しても不思議はないのであるが、彼は体質、気候、体質など、受け入れる側の違いによって、茶の効果が異なることを詳述し、留保条件をつけるのである。まず、ドイツの医者パウリ（Simon Pauli, 1603–80）の権威を借りて、その効能が地域限定であり、ヨーロッパの住人には合わないと言及する<sup>15</sup>。賛否両論ある場合に、反対する側の意見もほとんどの場合漏らさず伝えるショートの特長通り、「ペクリンがこの意見に反論し、多くの病気に効果があると主張している」と添えている<sup>16</sup>。

ショートが考える健康と病気は体液説に基づき、茶がどんな状況に適しているかについて考える場合に、体質、季節、人生における段階が考慮される。基本的に、茶は「乾性質」であるにとらえられる。それで、適切な濃さで適量であれば、「ゆるんでいてやわらかく、繊細な」身体をもち、「多血症や多汁」になりがちな女性にはより適している<sup>17</sup>。季節でいえば、「夏の暑いとき、冬の霧深く、曇りで湿った気候のとき、および秋分の後」には、「体液が粘性性に傾き、4体液が過剰になりがち」なので、茶を用いるのに最適である。茶は、「粘性を緩和し、繊維質を引き締め、循環、消化、分泌、排泄を正常化する」。成人の身体はそれ自体で充足しているので、成人は、薄める液体も刺激物も必要としない。子ども、若者、老人は助けを必要とする。ただし、老人は、循環も消化も

---

<sup>13</sup> Short, p. 19.

<sup>14</sup> Thomas Garwayのコーヒーハウスが出したチラシ。

<sup>15</sup> 1935年出版のユーカーズの書物（William Ukers, *All About Tea*）では、このパウリについて1635年出版の書物を引用し、茶は東洋では効能が認められるにしても、ヨーロッパの気候では危険なものとなり、特に40歳を過ぎた人の死を早めると述べているという記述がある。Ukers, , vol. I, pp. 29–30.

<sup>16</sup> Short, pp. 42–3. Jan Nikolaas PecklinまたはJohann Nicolaus Pecklin. Ukersでは、茶の効用を説いたオランダの内科医7人のうちの一人として本文で名前のみ触れられ（*All About Tea*, vol. I, p. 32）、文献表に次の項目がある。Pecklin, Johann Nicolaus. *Theophilus bibaculus, sive de potu theae dialogus* (Latin). Frankfurt, 1684.

<sup>17</sup> *Ibid.*, p. 61.

弱く、分泌が粗雑で、排泄は衰えており、粘液質になりがちであるが、茶よりも「温かい性質をもつ」赤ワイン（*Vinum lac senum*）を必要とする<sup>18</sup>。

ショートの新茶に対する抵抗は、茶を攻撃することではなく、茶と同様の効用をもつ国産植物に関心をもとうという勧誘のかたちをとる。彼にとっては、茶自体は薬効のある身体に恩恵をもたらすものであっても、社会的経済的に脅威であり、社会の誰をも虜にする外国産物品には、なるべく冷静な目をもって臨みたいのだ。彼が勧めるのは、セイジであり、これがかつては中国人が称讃し、茶と交換して持ち帰っていたと指摘する<sup>19</sup>。1750年の彼の茶を扱った書物第二弾になると、さすがにセイジは鳴りを潜め、茶税をめぐる政策批判や茶の経済的社会的影響に重心が移っている<sup>20</sup>。

### 3. ホガースの絵画

イギリスの諷刺画「創設の父」と称されるホガース（William Hogarth, 1697–1764）の油彩画『子供たちのティー・パーティ』（1730）という作品がある。可愛い題名にそぐわない光景が描かれている作品であり、ショートの新茶論と同年に描かれているので、これを次にみておこう。

伝記的事項から見ると、茶はホガースの人生に明るく有望な未来をもたらす見込みとは無縁のようだ。彼の父親は学校経営から古典語の教科書出版に移った後、ラテン語使用のコーヒーハウスを1703年から1707年か1708年ころまで経営し、その経営に失敗して1712年まで借金監獄に入っていた。1718年にはその父が亡くなり、一家に学業などに費やすことができる資金がなく、ウィリアムは徒弟修業に就くことになった。彼は、銀職人の作業場で徒弟としての修業を積み、1720年代に版画家としての仕事が本格化して、名刺のような店の紹介カードや書物の挿絵などを作成していた。彼の名声を高めた作品には、1732年の『娼婦一代』（*A Harlot's Progress*）、1735年の『放蕩息子一代』（*A Rake's Progress*）の道徳的物語を展開する版画連作がある<sup>21</sup>。

---

<sup>18</sup> Ibid., pp. 61–2.

<sup>19</sup> Ibid., pp. 66–9.

<sup>20</sup> Thomas Short, *Discourses on Tea, Sugar, Milk, Made-Wines, Spirits, Punch, Tobacco, & C. With Plain and Useful Rules for Gouty People* (London: Longman and Millar, 1750).

<sup>21</sup> David Bindman, 'Hogarth, William (1697–1764)', *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press, 2004; online edn, May 2009 [http://www.oxforddnb.com/view/article/13464, accessed 19 Oct 2011]

絵を連作にして一代記を託す手法 (narrative sequence) や、家族の団欒肖像画 (conversation piece) を得意としたホガースの作品の細部に、英文学者・歴史家・美術史家はさまざまな意味を読みこんでいる。1730年代ころに描かれた茶器が登場する絵画の中で、ホガースの茶の扱い方は、豊かな生活を象徴する小道具として肯定的に描かれている絵画がよくみられるなかで特殊であり、単に美味しく楽しいお茶を描いているわけではない<sup>22</sup>。ホガースの茶が描かれた作品のなかでは、『娼婦一代』の中の2枚目で、裕福な商人の旦那をもった主人公が、恋人の逃亡を助けるためにティーテーブルをひっくり返して旦那の注意を惹きつける場面を思いだすことができるだろう。田舎からでてきた純朴な少女から堂々たる娼婦になった主人公が送っている (転覆されるべき) 贅沢で優雅な生活を象徴する異国趣味のものとして、マホガニーのテーブル、猿、黒人の少年の使用人と共に、喫茶のためのセットがある。1738年のストロード家の肖像画では、一家の主人、新妻の間で召使が茶を注ぎ、主人の左に学識者の友人が座り、妻の右に軍人で主人の弟が立っている。油彩画の真ん中で、茶が注がれて、妻は既に注がれた茶を右手に持ち、満足げにしており、画面中央は和やかな夫婦の光景でもあるのだが、友人の方を向き、彼に親しげに茶を勧める主人と、厳しい表情をして端に立っている弟との間には、左端のスペインエルと右端のバグの2匹の犬との間のような緊張関係が伝わってくる。スペインエルの前には餌が置かれ、バグはじっと我慢しているように見えてくる。喫茶を楽しむもうとしている女性の平穩は、集まった人と犬それぞれの間にある複雑な感情のぶつかり合いのわずかで微妙な平衡にかろうじて助けられていることを感じさせる<sup>23</sup>。

1730年の「子どもたちのティー・パーティー」では、男の子が一人、女の子が3人描かれている。これが、どう見ても不吉なのだ。男の子は、太鼓をたたいていて、軍隊を思わせる。彼の後ろには、壊れた柱頭がある。画面中央近くの木の下の子は、鏡を持って、虚栄心を戒めるようにその鏡をわれわれ鑑賞者に向けている。彼女の右では、お人形がテーブルについているが、そのティーテーブルをスペインエルがひっくり返している。右側の女の子二人のうちには、花飾りが絡まる大きな壺があり、骨壺を連想させる。しかも、この絵は、同じく1730年の「トランプ札の家」と対になっているが、そちらには描か

<sup>22</sup> 滝口明子『英国紅茶論争』(東京:講談社選書メチエ、1996)、pp. 163-68.

<sup>23</sup> Matthew Craske, *William Hogarth* (London: Tate Gallery Publications, 2000), pp. 70-71.



れている年長の男の子がいなくなっている。つまり、このティー・パーティに描かれているのは、繁栄の後の崩壊、人間が逃れられない虚栄心、戦争、死である<sup>24</sup>。ホガースにとって茶は、東の間の平穏や贅沢を表し、その背後には、ショートが感じているような爆発的な流行に伴う漠然とした不安だけでなく、経済的繁栄の脆く崩れやすい頼りなさ、繁栄にいと簡単に心を奪われ、脚をすくわれやすい弱き人間のどうにもしようのない悲しさが控えているのである。



William Hogarth  
A Children's Tea Party  
oil on canvas 1730  
National Museum Wales

[http://www.wikigallery.org/  
wiki/painting\\_210473/  
William-Hogarth/  
A-Childrens-Tea-Party](http://www.wikigallery.org/wiki/painting_210473/William-Hogarth/A-Childrens-Tea-Party)

#### 4. 拒否の拠り所：

ショートが個人的嗜好と科学的見地からは受容したいが、どこか流行に不安を誘うものがあることをにおわせ、注意深く議論を進めたのに対し、1756年の出版物で反茶の立場を明確にしているハンウェイ（Jonas Hanway, bap. 1712, d.

<sup>24</sup> Ronald Paulson, *Hogarth: The 'Modern Moral Subject' 1697–1732* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1991), p. 213; James Christen Steward, *The New Child: British Art and the Origins of Modern Childhood, 1730–1830* (Berkeley: University Art Museum and Pacific Film Archive, University of California, Berkeley, in association with the University of Washington Press, 1995), pp. 136–37. 描かれているのは、ボンフレット伯爵家の子どもたちだという説があるとStewardは述べている (p. 136)。ボンフレット家には3人の息子と6人の娘がいて、長男ジョージ (2<sup>nd</sup> Earl) は1785年まで生きた。残りの二人は早く亡くなっている、もしもこの絵のモデルがボンフレット家であるとしたら、トランプの家には登場し、ティー・パーティでいなくなっている年長の男の子は次男、太鼓をたたいているのは三男ということになるだろう。ジョージと長女のソファイアは、ホガースの別の作品*The Indian Emperor* (1732) に登場している。

1786) の議論は、人が新たな外から入ってくるものをなるべくおしとどめたいと判断したときに駆使する手法の例として興味深いものである。

ハンウェイは、リスボンで商人として修業し、1555年に創設され、17世紀末までイングランドとモスクワ大公国の間の貿易を独占していたロシア会社（モスクワ会社）で働き、貿易商人として大成功し、18世紀にロンドンでさかんに創設されるようになった慈善施設に慈善家として参与するようになった。なかでも、海兵協会（1756年設立）、捨て子養育院（1741年設立）、売春婦更生施設マグダレン・ホスピタル（1758年開設）の設立や運営に深く関わった。1753年に『イギリスのカスピ海貿易の歴史』(*An Historical Account of the British Trade over the Caspian Sea*) を出版して好評を博し、続いて1756年に世に出た『ポーツマスからキングストン・アポン・テムズへの8日間の旅』(*A Journal of Eight Day's Journey from Portsmouth to Kingston upon Thames*) に、茶論が添えられている<sup>25</sup>。サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson, 1709–84) は、ハンウェイの著者としてのこの2点の仕事について、「外国を旅行して名声を得たが、国内で旅行してその名声をすべて失った」と述べている<sup>26</sup>。以後彼は数々の論考をパンフレットなどのかたちで出版していくことになった。

その茶論がどんな傾向をもつかについて、表紙及び扉絵を見ると明確にわかってしまう。表紙には、「健康に有害と考えられる茶について；勤勉を阻害し、国家を窮乏に至らしめる：その生育についての短い論考とこの国での大いなる消費について。ふたりの婦人にあてた20通の政治的考察書簡とともに。」とある。扉絵では、海の近くの木の下で二人の女性と一人の男性がお茶を楽しみ、その右ではやかんが湯気をもうもうとあげて倒れかけている。小さな女の子がそれを指さして注意を喚起しようとしているのに、大人たちは気づかぬままである。また、背景の海と海岸で起こっていることにも大人たちは素知らぬ顔をしている。海には密輸船と思しき船が停泊し、小船で荷物を岸に運び、海岸では大きな荷物を人々が肩に担いで運んでいる。

ハンウェイが何を利用して自らの立場を訴えようとするのか、順にみてみよ

---

<sup>25</sup> James Stephen Taylor, 'Hanway, Jonas (*hap.* 1712, *d.* 1786)', *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press, 2004; online edn, Jan 2008 [http://www.oxforddnb.com/view/article/12230, accessed 19 Oct 2011]

<sup>26</sup> James Boswell, *Boswell's Life of Johnson : Together with Boswell's Journal of a Tour to the Hebrides and Johnson's Diary of a Journey into North Wales*, rev ed. ed., 6 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1934), vol 2, p. 122.

う。まず、彼が重点をおくのが愛国心である。彼の論調は単純明快で、「[この論考]の主題は、愛国心である」とまで述べる<sup>27</sup>。そして、「自由な人間として生まれた英国人」が中毒性をもつ茶に囚われてしまっているのか、「地球上で最も女々しい国民が愛飲しているものを」飲むようになっていいのかと問う。彼にとって茶を飲む習慣は、「暴君的」であり「束縛」である<sup>28</sup>。そして、イギリス人の愛国心を鼓舞するにあたって最も効果的な国を挙げて、さらに愛国心を煽ろうとする。フランスの脅威である。1745年にはジャコバイトの蜂起を経て、1754年以来の北アメリカで対立が明確化し、ハンウェイがこの書物を出版した同年の1756年には7年戦争が始まり、フランスに対する警戒心が高まっていた時期である。彼によれば、イギリスでの茶の需要があまりにも急激に上昇しているため、輸入をフランスが中国から運んでくる茶にまで依存するようになり、密輸が横行して、その結果「我々の愚行のおかげで[フランス]が利益を得る」事態を招いている<sup>29</sup>。

数字を挙げて危機感を煽る場面では、主に人口減と銀の流出による国力の低下、これつまり有益な兵力の減少と軍費を含めた国家財政の窮乏ということに直結し、愛国心の問題につながっていく。「この緩効性毒物により、一年に1,000人のうち一人が死ぬとしたら、200万人の喫茶者のなかから国家は2,000人もの臣民を失うという痛手を受けている<sup>30</sup>。」イギリスの人口は、1680年に650万人、1840年では1,850万人と見積もられており、長い18世紀をとると3倍近くに増加していることになり、ハンウェイの人口減の不安は的を外しているように思えるが、17世紀の最後の20年間にゆるやかに減少して1700年には500万人となり、1730年代には鋭く減少する一時期があった<sup>31</sup>。ハンウェイは、個人的体験として、茶を飲んでお腹をこわしたことがあるらしく、自分の感覚で得たものに反することは信じないと述べ、医者がいくら茶は健康に良いと言っても自

---

<sup>27</sup> Jonas Hanway, *A Journal of Eight Days Journey from Portsmouth to Kingston Upon Thames ... In a Series of Sixty-Four Letters: Addressed to Two Ladies of the Partie. To Which Is Added, an Essay on Tea ... With Several Political Reflections; and Thoughts on Public Love ... By a Gentleman of the Partie* [I.E. Jonas Hanway] (London: printed by H. Woodfall, 1756), p. 204.

<sup>28</sup> *Ibid.*, pp. 208, 213.

<sup>29</sup> *Ibid.*, p. 216; Ukers, II, p. 124. イギリス東インド会社が輸入する茶の他に密輸されてくる茶がかなりの量にのぼり、それはヨーロッパの他国のライバル会社が中国から運び、海峡を越えてくるものであるという認識は、ハンウェイだけのものではなかった (see for example, Keay, p. 349)

<sup>30</sup> Hanway, p. 230.

<sup>31</sup> Cambridge Histories Online; E. A. Wrigley and Roger Schofield, *The Population History of England 1541–1871: A Reconstruction* (Cambridge: Cambridge University Press, 1989, 1981), p. 575.

分は信じないと宣言している。ここでも、「感覚に反するものを信じることを要求する宗教はローマの宗教以外にはない」とわざわざ述べて、カトリックへの反感を利用しようとする<sup>32</sup>。

女性たちへの手紙の形式をとっているこの茶論は、思いのままに話題を展開していくことが不自然にならない手紙形式の利点を存分に活かして、次から次へと注目を移していく。ジンの飲用が人々に及ぼす悪影響をホガースが印象的に描きだしたのは1751年だった。ハンウェイは、「茶は第二のジンである！」と述べ、ジンと茶が父親にも母親にも、そして子供たちの健康を損ない、勤勉を阻害して、社会を墮落に導くと説く<sup>33</sup>。この国の美人が減ったのも、茶をすすめる人が増えたせいである<sup>34</sup>。熱い湯は歯に悪影響を与え、茶をいれるために湯を沸かすのは、‘We live in hot water’（苦境にある）の譬えの通り、ロクなことがない<sup>35</sup>。また、茶は現代病の象徴であり、まさに過度の贅沢であり、文明の爛熟に他ならない。茶の流行前には、憂鬱症などの病気は「繊細な淑女の間でさえもよくあるものではなく、貧しい人々の間では滅多にみられなかった。」それが今では上の者の真似をして（「日雇い人や機械工が貴族様の猿真似をして」）、パンも買えないような貧しい人々が朝晩茶を飲むという嘆かわしい習慣を身につけている<sup>36</sup>。そしてまた、茶は、誤魔化しを許し、人を虚偽の道に誘う性質の悪い商品で、メイドたちは使い回しをして出がらしを売り払って小銭を得ている<sup>37</sup>。以上のように、健康、道徳、政治、経済、文明論などさまざまな側面から、理由を述べ立て、手紙の受けての女性の虚栄心に訴えることも忘れない。また、彼は自分の立場についての憶測も十分に意識している。「私が茶に反対して言ってきていることは、[東インド会社の役員たち]への偏見をひとかけらももつものではありません」を彼は添えることを忘れないが、別の貿易会社に従事していた彼の発言にまったくそのかけらもないと考えてよいかどうかは容易に判断できる<sup>38</sup>。そのような散漫さを補うためか、冒頭でみせている著者となることへの気負いのためか、この茶論の後半部分で、彼は茶と砂糖による税収の代替案9か条、幸福を実現するための7か条を提案して、組織的な議論を装

---

<sup>32</sup> Hanway, p. 227.

<sup>33</sup> Ibid., pp. 235–36.

<sup>34</sup> Ibid., p. 222.

<sup>35</sup> Ibid., pp. 222, 273.

<sup>36</sup> Ibid., pp. 238–39, 244.

<sup>37</sup> Ibid., p. 236.

<sup>38</sup> Ibid., p. 300.

うポーズも見せている<sup>39</sup>。

この茶論には、貿易収支の問題や、東インド会社の経営方針への疑問など、この時期以降に明白に顕在化する指摘も含まれており、酔狂な変人の戯言では済まないのであるが、彼は警戒心を呼び起こすことに失敗した。サミュエル・ジョンソンは書評でこれを取りあげ、まともに反論するというよりも、まずは自分の嗜好と状況を白状して、逆に正々堂々と自分の立場を明確にするポーズをとりながら、まさに茶化してしまい、ハンウェイの議論を封ずる。ジョンソンは、自分を既に茶の愛好が確定した習慣となっている個人の具体例として挙げ、茶を抑制しようとしても無駄であることを示そうとするのだ。ハンウェイが婦人への手紙の形式を借りて国家や道徳を語ろうというのに対し、ジョンソンは自虐で対抗し始める。

ハンウェイ氏は、茶の消費がわれわれの国の利益を損なうということを示そうとしている。現代のこの贅沢品に関する彼の考察をたどっていくことにしよう。しかし、まず最初に、抜粋書評の作者である私からあまり正義を期待してはいけないと宣言しておかないのは率直さを欠くということになる。なぜなら、この作者は、ここ20年にわたってこの素晴らしい植物からの浸出液で食事を希釈し、やかんが冷める暇もないくらいに湯を沸か

---

<sup>39</sup> 9か条と7か条は、それぞれ面白いので、ここに挙げておくことにする。

茶、砂糖の税収代替、税収改善策 (ibid., pp. 263-68)

1. 自国で消費しないで他国に売りつける。
2. 鉄の使用を控えてスウェーデンへの支払いを抑制する。
3. 金属平版を確保する。
4. 金銀のレースや刺繍もの着用者に課税する。
5. 金銀の宝飾品着用女性に課税する。
6. 12か月の猶予を設けたうえで鬘着用者に課税する。
7. トランプ遊びに課税する。
8. 馬車税を2倍にする。
9. 使用人を雇っている人に課税する (男性召使一人、あるいは女性召使2人につき。)

幸福達成のために重要なこと (ibid., pp. 351-56)

1. 結婚奨励。特に貧民の間で。
2. 飲酒抑制。
3. 孤児院補助。
4. 禁茶。
5. 船乗り優遇。
6. 財政状況改善。
7. 神をおそれ、神の掟に従うこと。

し、夕の娯楽を茶で楽しみ、晩には茶で慰めを得て、朝を茶で迎えるという、面の皮の厚い恥知らずな茶愛好家だからである<sup>40</sup>。

自分が既に茶に征服されてしまった愛飲者なので、まともな反応をすることができないと述べて、茶の虜になった多くの人々の感情を代弁して、ハンウェイをやりすごしてしまうのだ。ただ単にハンウェイの議論の力が不足していたのではなく、1750年代にはもう既に茶があまりにも多くの人々の日常生活に浸透していた。ジョンソンの反論は、極めて個人的嗜好に基づきながら、民主的反応になっていた。

Boswell, James. *Boswell's Life of Johnson : Together with Boswell's Journal of a Tour to the Hebrides and Johnson's Diary of a Journey into North Wales*. rev ed. ed. 6 vols. Oxford: Clarendon Press, 1934.

Craske, Matthew. *William Hogarth*. London: Tate Gallery Publications, 2000.

Hanway, Jonas. *A Journal of Eight Days Journey from Portsmouth to Kingston Upon Thames ... In a Series of Sixty-Four Letters: Addressed to Two Ladies of the Partie. To Which Is Added, an Essay on Tea ... With Several Political Reflections; and Thoughts on Public Love ... By a Gentleman of the Partie [I.E. Jonas Hanway]*. London: printed by H. Woodfall, 1756.

Keay, John. *The Honourable Company : A History of the English East India Company*. London: HarperCollins, 1991.

Lawson, Philip. *The East India Company : A History*. London: Longman, 1993.

Paulson, Ronald. *Hogarth: The 'Modern Moral Subject' 1697– 1732*. New Brunswick: Rutgers University Press, 1991.

Ribeiro, Aileen. *Fashion and Fiction : Dress in Art and Literature in Stuart England*. New Haven, Conn. ; London: Yale University Press, 2005.

Ribeiro, Aileen. *The Gallery of Fashion*. London: National Portrait Gallery, 2000.

Robins, Nick. *The Corporation That Changed the World : How the East India Company Shaped the Modern Multinational*. London: Pluto Press, 2006.

Short, Thomas. *Discourses on Tea, Sugar, Milk, Made-Wines, Spirits, Punch, To-*

---

<sup>40</sup> *Literary Magazine* 2, no. 13 (1757).

*bacco*, & C. *With Plain and Useful Rules for Gouty People*. London: Longman and Millar, 1750.

Short, Thomas. *A Dissertation Upon Tea, Explaining the Nature and Properties by Many New Experiments; and Demonstrating from Philosophical Principles, the Various Effects It Has on Different Constitutions....* . London: Fletcher Gyles, 1730.

Steward, James Christen. *The New Child : British Art and the Origins of Modern Childhood, 1730 – 1830*. Berkeley: University Art Museum and Pacific Film Archive, University of California, Berkeley, in association with the University of Washington Press, 1995.

Ukers, William H. *All About Tea*. New York: The Tea and Coffee Trade Journal Company, 1935.

Wrigley, E. A., and Roger Schofield. *The Population History of England 1541 – 1871 : A Reconstruction*. Cambridge: Cambridge University Press, 1989, 1981.

Bindman, David. “Hogarth, William (1697–1764).” In *Oxford Dictionary of National Biography*, edited by H. C. G. Matthew and Brian Harrison. Oxford: OUP, 2004. Online ed., edited by Lawrence Goldman, May 2009. <http://www.oxforddnb.com/view/article/13464> (accessed October 19, 2011).

Moore, Norman . “Short, Thomas (c.1690–1772).” Rev. Patrick Wallis. In *Oxford Dictionary of National Biography*, edited by H. C. G. Matthew and Brian Harrison. Oxford: OUP, 2004. Online ed., edited by Lawrence Goldman,. <http://www.oxforddnb.com/view/article/25461> (accessed October 19, 2011).

Taylor, James Stephen. “Hanway, Jonas (*hap.* 1712, *d.* 1786).” In *Oxford Dictionary of National Biography*, edited by H. C. G. Matthew and Brian Harrison. Oxford: OUP, 2004. Online ed., edited by Lawrence Goldman, January 2008. <http://www.oxforddnb.com/view/article/12230> (accessed October 19, 2011).